

四 起てよ奮へよ今は時

人生問題や生死問題に就いては、誰しも他に譲り切つて、まさかに「誰かすればよいに」位でもありませんまいが、「云何かせねばならぬ」と云ふ間に月日が経つて、今日ぞと引上げる時がないのでありませう。不自由不自由で過すのであらう。一人一人のしのぎだのに、全然、御輿かつぎの様な氣で居りはすまいか。大勢がガヤ／＼御輿を擔いで大道を練り歩く調子に、問題の分擔をして居る心ゆゑ、痛切に自分の問題となつて來ない。足が浮いたり肩がはづれたり、空手で騒いで居る。人の食つた御飯では、自分のお腹はふくれないのに。其の間に介在して居て、自分は最早食つて了つた氣でをる。けれど段々に飢餓に逼り來るを如何にせん。

比叡山の或お寺に一人のお兒があつて、或晩、坊さん達は退屈まぎれに、萩の餅を拵へて食べやうではないかと、相談一決して、みんなそれを待つかゝる。小僧は傍に聞いて居て、直に出薩張るのも變だし、出來るのを待つて寝ないのも悪いだらう。さうだく、呼び起されるまで寝て居やうと、片隅によつて寝たふりをして居た。間もなく萩の餅が出來上つたので、坊さん達は「その子にも食べさせやうではないか」と云つて、「オイ兒さん兒さん起きて入らつしやい。萩の餅が出來ましたよ」と呼び起したけれど、返事がない。「たゞ一度で返事すると、如何にも待つて居たやうに思はれるから、今一聲呼ばれて返事をせうと思つてゐる。すると一人の坊さんが、「疲れてよく寝てゐるやうだから、もう起すなく」とやつた。小僧は、これは仕舞つた。今一度起してくれないかしらと思つて、凝と待つて居ると、早ムシヤくと、舌鼓鳴らして食べる音がする。小僧はもう堪らなくなつて、「ハイ」と出し抜けに、高らかに返事をしたので、坊さん達は大笑に笑つた。『宇治拾遺物語』

「尼入道の嬉しやくくと喜ぶを聞いて人が信をとるなり」。實際餅が欲しくなつたら、他が起さいでも起きて来て、食はうとするのが人情。此の場合武士は食はねど高楊子も出来ない。しつかりお慈悲を腹に食ひ込んで、狸の腹鼓式に念佛を申さねばならぬ。

成程、人の食つたのでは自分の代用に成ぬ、とはいへ狂れて甚しくなると大變な事を思付く。或人が何でも知つてると云ふ先生の許へ行つて、「先生餘り突然ですが、寝てゐて食はれる法はありますまいか」と云ふ。先生は「不思議なお尋ねですネ、だが凡そ世間に寝て居て食はれる者は、妾と娼妓、財産家の隠居位のもので、後は悉く働いて食ふのが當然の務のやうですが」と答へられる。「それでは僕の望は到底駄目でげせうか」。「駄目と云ふ譯でもありますまい、併し只は御免です」。「只ぢやない一圓位報酬をしますが」。「一生生涯寝て居て食はれる名法を教へてあげるのに二圓では餘り安すぎませう」。「それでは何程で教へてくれます」。「まづ二十圓の價値はありますが、貴公の事だからギリぐ決着金五圓に負けて教へませう」。「一時拂ですか、月賦ですか」。「謝金にそんな事がありますか」。「イヤ御尤も千萬。それでは若し寝て居て食はれる身分になつたら、百圓出ませう」。「それはまた其の時の話さ。先づ當金五圓でなくては、御傳授は出来ませぬ」。「それは困りやした今の處は白銅二個の身上だから、仕方はない、竈と鍋釜米櫃を賣拂つた上でなくては……」。「夫迄に窮した人の金を取つた處で、仕舞に首でも縊られて、其恨が祟るやうでも困る、よろしい只で傳授ませう」。「それは有難い流石先生だ」。「併し莫菴が一枚、枕が一個入用だが、此位は持つて居られるだらう」。「お易い事、それは持つて居ます」。「それなら安心だ、先づ寝てゐて食はれる法は、其の莫菴と枕とを持つて、夜中只一人深山幽谷、何れでも

人里離れた處へ行つて、横倒るのです。「態々深山幽谷へ行くんですか」。「それは仕方がない」。「へい」。「するとザワ／＼と、梢から散る木の葉の音、谷川の流れ物淒く。腥い風がフーと吹いて。……」。「まあ待つて下さい、何だか身體が戦慄冷くなつて來やした、随分氣味が悪い」。「お止めなさるか」「止めるのもこだテ、宜しい遣りませう」。「お止めなさつた方が無事ですぜ」。「少し薄氣味は悪いが、まあ遣つてみませう」。「すると人間の寢息を考へて、狼が一疋出て來るかと思ふと、亦一疋、續いて何疋もく寄つて來て、寢てゐて食はれる事は、屹度請合です」。

寢てゐて食はれる法。寢てゐて食はうとすると、却つて他に食はれて仕舞ふ。それほど阿彌陀様がお慈悲が深いのなら、信心はなくとも、疑ひながらでも、往生は出來さうなものだと、横着をきめ込んでゐると、今に鬼に食はれて了ふ。「皆人の歳をとるとて喜べど、歳に命をとられこそすれ」。「よく聞いた聞いた領解が玉に瑕、心たのんで彌陀をたのまず」。「油斷すな押しかけてくる火の車、六字の外に逃道はなし」邪見橋慢は大禁物だ。